

割れ甕の流通

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

中世から近世初頭の京都で用いられた焼き物の大型容器といえば、常滑焼と備前焼の大甕がその市場を席巻しています。ともに中世初頭から酸化焰焼成で固く焼締める焼締陶器へと移行し、内容量200～300リットルの大甕を大量に生産して、京都のみならず全国に供給していました。いかり肩で、口縁部の縁を折り返して平らな面をつくる常滑焼の大甕、これに対して、なで肩で口縁部の端を折り返して玉縁につくる備前焼の大甕、それぞれがきわめて特徴的な姿をしています。これらの大甕は重いので移動や運搬には困難をとまいますが、耐久性があり、液体を貯蔵するのに適しています。

京都市下京区旧尚徳中学校の発掘調査では、地面を掘下げた窪みが300箇所以上、整然と並んでいるのが見つかり、その窪みから室町時代の常滑焼の大甕の破片が出土しています。ここは酒屋の跡とみられ、窪みには大甕が据え付けられ、その中で酒が醸造されていたものと考えられています。また、山科本願寺跡の発掘調査では蔵の跡が見つかり、その床には室町時代の備前焼の大甕8基と常滑焼の大甕1基が整然と並べて埋めてありました。内容物は明らかになりませんが、山科本願寺で暮らす人達の生活物資が貯蔵されて



写真1 備前焼大甕(器高96.4cm)山科本願寺跡出土



写真1の補修跡外面(左)と内面(右)

いたようです。

さて、2012年に実施した山科本願寺跡の発掘調査では、備前焼の大甕を床に埋め込んだ遺構が見つ

かりました。ここは山科本願寺の中枢部で炊事(つくりごと)を掌る場所と考えられ、この大甕は食料あるいは水などを貯蔵するのに用いられたもの



写真2 常滑焼大甕（器高83.9cm）の外側（左）と内側（右） 下京区花畑町出土

と考えられます。この甕を取り上げたところ意外な事実が浮かび上がってきました。この甕の下部外側に見慣れないものが付着していたのです。それは³⁵¹漆を塗った布でした。さらにその部分をよく観察すると、甕の体部にヒビ割れが入っていたことが明らかとなりました。ヒビ割れを漆を塗った布で補修していたのです。また、このヒビ割れは甕を使用しているうちに生じたものではなく、窯の中で焼成途中に生じたものであることもわかりました。つまり、この甕は生産過程の不良品だったのです（写真1）。

ところが、同じような備前焼の大甕が2001年に実施した教王護国寺（東寺）境内の発掘調査でも出土していました。この甕は底の部分で打ち欠いて、井戸枠として再利用されていたが、山科本願寺のものと同じく側面に焼成時に生じたヒビ割れがあり、漆を塗った布を当てて補修していました。元は、液体を貯蔵する容器として

利用されていたのでしょう。ただ、このヒビは広範囲にわたっており、購入者が見落としたとは考えられず、傷を承知の上で購入したと思われる。

さらに、2014年に実施した京都市下京区花畑町の発掘調査では、甕藏と考えられる埋め甕群が3箇所で見つかりました。この内の1箇所では鎌倉時代末期の常滑焼の大甕が2基据えられていました。これらの甕には焼成時に生じた石ハゼや細かいヒビ割れが随所に認められ、漆を塗った布や漆を甕の内外から押し当てて補修がしてありました（写真2）。

こうした例から、中世には生産過程で生じたヒビ割れや石ハゼによって水漏れするような不良品の甕が、立派に商品として流通していたことがわかります。おそらくこうした不良品でも、生産地から京都へ持ち込んで売りさばれば、採算が取れたに違いありません。購入者にとっては多少の不便さを



漆による補修跡（写真2の外側）

いとわなければ、安価に仕入れることができるありがたい品だったのではないのでしょうか。当時、どれほどの価格で取引されていたのかはわかりませんが、大甕が貴重品だったことを示す実例といえるでしょう。

また、漆と布を用いた補修跡はいずれもよく似ています。案外、こうした割れ甕を補修する専門の職人が京都にはいたのかも知れません。中世には、ものを大切にする習慣が根付いていたようです。

（吉崎 伸）